2021 年２月 21 日（日）「知恵の初め」

《聖書協会共同訳》コヘレトの言葉 7:23-24

23 これらすべてを知恵によって吟味し、私は「知恵ある者になろう」と口にした。だが、遠く及ばなかった。

24 存在するものは遠く深く、さらに深い。誰がそれを見いだせるのか。

《新改訳 2017》伝道者の書 7:23-24

23 私は、これらの一切を知恵によって試みた。私は言った。「私は知恵のある者になりたい」と。しかし、それは私には遠く及ばないことだった。

24 今までにあったことは、遠く、とても深い。だれがそれを見極めることができるだろうか。

【序論】

コヘレト７章は「知恵の章」と言ってもよいところです。言ってみれば「箴言的」な要素が色濃く出ている章であります。７章も今日を含めてあと２回で終わりますが、知恵の結論が示されつつある。とは言いましても、これで「知恵」に関する話題が終わってしまうわけではなく、ひとまずの小結論が与えられるということです。そもそも人間にとっての「知恵」とは何なのか。読者である私たちは喉から手が出るほどそれを知りたい。ここではもちろん「生活の知恵」という低い次元の事柄が言われているのでないことは明らかでしょう。人がそれを心の奥底に持つことができれば、生き方、考え方に根本的な変化が現れる何かです。これは、学問の探求によっても到達することのできないものであり、どうしても宗教が必要になってくる。人間を超越した存在抜きには、至高の知恵を見出すことはできないからです。前回は「**地上には、罪を犯さずに善のみを行う正しき者はいない**」（7:20）という人間理解そのものが「知恵」であるということが語られていました。今日は更に一歩進んで、知恵の根源を探ることになります。

【本論】

本論１．「知恵ある者」とは

これらすべてを知恵によって吟味し、私は「知恵ある者になろう」と口にした。だが、遠く及ばなかった。（7:23）

コヘレトは知恵の探求に邁進し、ついに一つの目標を見出しました。それは、自分自身

が「知恵ある者になる」ということです。ここでは未来形の動詞が使われていて、彼が知者を目指して何らかの行動を取ったことが窺われます。

冒頭の「**これらすべて**」という部分が何を指すのかはやや曖昧ですが、7:1-22 の内容を指していると考えるのが自然でしょう。そこでは、大体次のようなことが「知恵」として語られていました。

①死を直視して生きること（7:1-10）
②富を神のものとすること（7:11-12）
③変わらぬ真理を見つめ続けること（7:13-14）
④人を裁かず、罪に無感覚にもならないこと（7:15-18）
⑤自分を含め、人間は言葉において罪を犯す存在である事実を認めること（7:19-22）

コヘレトはこれらを総括し、「どれ、それなら全部行なってやろう」と考えたのでしょう。しかし、彼は自分の思考・言動・行動が理想とはかけ離れていることを知り、愕然としました。「知恵ある生き方」がどういうものであるかが分かってきているのに、それを行なう力がないのです。

コヘレトが感じていることに私は深く共感を覚えます。私は救いを知ったときに、自分には特別な知恵が与えられたように感じました。事実、そうだったのかもしれません。しかし、その瞬間に私は愚かになってもいました。自分に与えられた恵みの体験を誇り、心は高ぶっていたのです。経験とか知識というものは、かえって人を愚かにさせる危険性があります。むしろ、自分は何も分かっていないことを知ることこそが知恵への第一歩と言えるでしょう。

コヘレトは「**知恵ある者になろう**」と高い志を掲げましたが、その願望は脆くも崩れ去りました。まことの知恵は神にのみ属していること、そして人間は愚かな存在であるという結論に達したのです。しかし、実はここに知恵がある。神に義をお返しし、自分の間違いを認めてへりくだるところに知恵は始まるのです。

主を畏れることは知識の初め。無知な者は知恵も諭しも侮る。（箴言 1:7）

箴言では知恵は神の戒めと直接結びついています。神を畏れ、礼拝し、御言葉に従って生きるところに知恵があると教えられている。それは言い換えるならば、自分が何者でもないことを知り、神だけが正しいと認めることなのです。

<u>本論２．神の知恵の深み</u>

存在するものは遠く深く、さらに深い。誰がそれを見いだせるのか。（7:24）

「**存在するもの**」という部分（מַה־שֶּׁהָיָה／マー・セハーヤー）は「今ある事柄」と訳

してもよいでしょう。私たちが見ている現実は、なぜそういうことが起きているのか、到底説明し尽くすことができません。その意味は神だけがご存知である。神の御旨の深さと、それに触れることのできない人間の無力さ。それは一見人間に絶望を与えるもののように見えますが、むしろ神の摂理に身を任せる信仰に至らせうるものでもある。

「深い」という表現から思い起こす聖句があります。人生の絶頂期から一挙にどん底に突き落とされたヨブの言葉です。彼はなぜ自分の人生にそのようなことが起きるのかが理解できずに苦しみました。その苦悩の中で「知恵」について考えました。知恵のありかを探し求め、彼もまた一つの結論に到達していきます。

> **では、知恵はどこに見いだされるのか。分別はどこにあるのか。人はそこに至る道を知らない。生ける者の地には見いだされない。深い淵は言う、「それは私の中にはない」と。海は言う、「私のところにもない」と。知恵によって純金を得ることはできず、銀がその値として量られることもない。オフィルの金でも、高価なカーネリアンやラピスラズリでも引き換えにできない。金もガラスもそれに比べることはできず、純金の器もそれと交換できない。さんごと水晶は言うに及ばず、知恵から得るものは真珠にまさる。クシュのトパーズもそれに比べることはできず、純金でも引き換えにできない。では、知恵はどこから来るのか。分別はどこにあるのか。それは生ける者すべての目に隠され、空の鳥にも隠されている。滅びの国も死も言う。「私たちは耳でそれを伝え聞いたことがある。」神はその道を悟り、神がその場所を知っておられる。神は地の果てまで目を凝らし、天の下をことごとく見ておられる。神は風に重さを与え、水を秤で量る。雨には定めを、稲妻には道を与えたとき、神は知恵を見て、これについて語り、これを確かめ、探し出した。そして、人に言われた。「主を畏れること、これが知恵である。悪を離れること、これが分別である。」**
>
> (ヨブ 28:12-28)

ここでもやはり「**主を畏れること、これが知恵である**」と言われています。明快な答えです。今日のメッセージの冒頭で申し上げた「人がそれを心の奥底に持つことができれば、生き方、考え方に根本的な変化が現れる何か」とは、まさに「神を畏れること」なのです。７章に入ってから学んできた一連の「知恵」と呼ばれる生き方のベースにあるものは「神への畏れ」です。自分を正しい者とせず、神だけが正しいと考えるへりくだった生き方であります。

本論３．新約における知恵の展開（ローマ書／Ｉコリント）

「コヘレトの言葉」で一貫している思想、彼が読者に一番伝えたいことは「神を畏れて生きる」ことです。それは、本書の結論である 12:13 の聖句からも明らかでしょう。

聞き取ったすべての言葉の結論。神を畏れ、その戒めを守れ。これこそ人間のすべてである。（12:13）

新約聖書でも「知恵」について教えている箇所は少なからずありますが、旧約を大きく超えていきます。知恵は「誰に対して」「どのように」与えられるのかというところまで明らかにされていく。

まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかに、だれが知っているでしょう。同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜ったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。御霊を受けている人は、すべてのことをわきまえますが、自分はだれによってもわきまえられません。いったい、「だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。」ところが、私たちには、キリストの心があるのです。（Ｉコリント2:9-16／新改訳）

これはキリスト者に啓示された「神の奥義」です。言い換えるならば、「福音の真理」です。神がどのように人を救われるのか。それは、人間の知恵から出るものとはまったく異なる方法によりました。本来審き主であるはずの神の子が、不法な人間の法廷で裁かれ、十字架という呪いの刑罰を受けて死なれる。悪に対して一切の抵抗をせず、敗北とも見えるような死に方をされる。ところが、主イエスはそのような死を遂げることにより、人の憎悪に愛でもって打ち勝ち、憎しみの連鎖を断ち切られた。更に、死から甦り、多くの人の罪を赦し、復活の初穂となられた。

新約においては、このように「神の知恵」ははるか先まで進んでいきます。しかし、その真理を受け取るための共通の「心」がある。それは、やはり「神への畏れ」であり、自分の罪を認め、へりくだることなのです。自分の内に救いの道を見出すことができないことを知った者に、神はこの特別な福音を呈示してくださる。キリストが罪人を愛してくださっていることを教えてくださるのです。

ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。神の裁きのいかに究め難く、その道のいかにたどり難いことか。「誰が主の思いを知っていたであろうか。誰が主の助言者となっただろうか。」（ローマ 11:33-34）

神は聖霊を通してご自分の愛（キリストの思い）を人間に開示してくださるのです。

【結論】

今日は「主を畏れることが知恵のはじめである」という根本原理を思い起こしました。神への畏れがあるところに、神の愛の御旨への気づきがあります。この愛の御旨を受け取るためには、柔らかな心の土壌が必要です。人の心を柔らかくするのも、神を畏れる心を与えるのも、聖霊の働きによるでしょう。聖霊は聖書の御言葉を通して人に働きかけます。一粒の種として神のことばが人の心に落ちる。そこに聖霊の働きが始まるのです。

【祈り】

知恵と知識の源であられる神よ。有限である私たち人間には、物事のほんの一部しか知ることが許されておりません。そのことにもどかしさを覚えるとともに、それゆえにこそすべてを知っておられるあなたの御前にへりくだり、委ねる信仰に生きることができます。私たちが神を畏れ、自らの罪を認め、救いを求めるところに、聖書が言うところの「知恵」が始まるということを改めて確認しました。私たちに、福音に生きる柔らかな心を聖霊によっていつも与えていてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
主を畏れることを「知恵の初め」となし給う、父なる神の愛、
へりくだり、救いを求める者を、惜しみなく御許に招き入れ給う、主イエス・キリストの恵み、
人の心の土壌を柔らかくし、福音に生きる道へと常に導き給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。